

聖書：マルコの福音書 6：45～56

説教題：しっかりしなさい。わたしだ

日時：2025 年 10 月 19 日（朝拝）

今日の記事は 5000 人の給食の後の出来事を記したものです。イエス様は、それからすぐに「弟子たちを無理やり舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダ」へ行かせようとしています。なぜでしょうか。31 節に記されていたように、イエス様はもともと弟子たちを休ませようとしておられました。その本来の休息へと追い立てるためだったのでしょうか。それとも他の福音書の平行記事を読むと、群衆は 5000 人の給食の奇跡を体験して、イエス様を王とするために連れて行こうとしたとあります。人々はそれだけイエス様に熱狂的になったのです。けれどもイエス様はローマに対抗するこの世の王、いわゆる地上的・武力メシアとして来たものではありません。ともすると弟子たちの間にも、そのような期待があったことが聖書の他の箇所から分かります。イエス様はそのような誤った期待に弟子たちが巻き込まれないように、無理やりこの場所から離れるよう弟子たちを追い立てたのかもしれませんが。そしてその後、ご自分で群衆を解散させられました。

その後、イエス様は祈るために山へと向かわれました。マルコの福音書には、イエス様が祈られた場面が 3 回記されています。1 回目は 1 章 35 節で、多くの病人を癒やしたり、悪霊を追い出すみわざをされた後、翌朝も人々がイエス様を捜し求めているという状況での祈りでした。2 回目が今日の箇所で、3 回目は 14 章 32 節以降の、いわゆるゲッセマネの園での祈りです。いずれも重大な時であったと考えられます。イエス様はそこで、ご自身がこの世に來られた使命を父なる神との祈りの交わりの中で改めて確認されたのです。今日の箇所でも、人々はイエス様を王に祭り上げようとしていました。この頃、イエス様の地上における人気はピークに達していたと考えられます。そんな中、イエス様は祈りをもってご自分の行くべき道を進もうとされたのです。それはとりもなおさず、福音を宣べ伝えつつ、やがて十字架へと向かう道を選び取って進まれたということでしょう。

さて、先に出発した弟子たちの舟はどうなっていたかというところ、この時、向かい風のために漕ぎあぐねていました。47 節に「夕方になったとき」とありますが、5000 人の給食が行われた時点ですでに「遅い時刻」と言われていましたから、ここでの「夕

方」はかなり遅い時間だったと思われます。その時、舟は湖の真ん中にありました。ところが 48 節を見ると「夜明けが近づいたころ」になっても、まだ漕ぎあぐねていたとあります。「夜明け」という部分には印が付いていて、欄外の注を見ると、直訳では「第四の夜回り」、すなわち午前 3～6 時と記されています。つまり夜中の三時を過ぎても、まだ岸にたどり着かず、悪戦苦闘していたのです。その様子を知ってイエス様は彼らのところへ行かれました。ここに注目すべき不思議なことが二つ書いてあります。その一つはイエス様が「湖の上を歩いて」彼らのところに行かれたということです。なぜそんな方法を？と私たちは一瞬思いますが、飛行機で飛んで行くわけにも行きませんし、嵐の中、別の船で追いつくというのも考えられないことです。とすると他の手段はなく、イエス様は湖の上を歩いて近づかれた——ということになります。これは信じられないようなことです。しかしここに非常に大切な真理が示されています。それはイエス様は神なるお方であるということです。旧約聖書には、神こそ水の上を歩かれる方であるという御言葉があります。たとえばヨブ記 9 章 8 節にこうあります。「神はただひとりで天を延べ広げ、海の大波を踏みつけられる。」 聖書において海とはしばしば危険で、制御不能で、混沌としており、邪悪な力の象徴とされる場所です。しかしそんな海をも神は支配しておられる。波を従わせ、その上を歩かれる方であられると語られています。イエス様はまさに、そのような神ご自身であられる！そのことがここに示されています。前回の 5000 人の給食においても、すでにイエス様の神性は明らかにされました。それに引き続きここでもイエス様が神であられることがこうして示されたのです。

もう一つの不思議な点は、イエス様が弟子たちの近くまで来たものの、「そばを通り過ぎるおつもりであった」と記されていることです。これはどういうことでしょうか。助けに来られたのに、そばを通り過ぎようとされた——まるでからかっているかのようにも読めます。しかしもちろん、イエス様がそんなことをされるはずはありません。この「通り過ぎる」という動作は、旧約聖書においてしばしばセオファニー、神の顕現を示す際に用いられたものです。たとえばモーセがシナイ山で主に「どうか、あなたの栄光を私に見せてください」と願った時、主なる神は出エジプト記 33 章 19 節でこう言われました。「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、主の名であなたの前に宣言する」と。そしてモーセを岩の裂け目に入れ、その前を主が「通り過ぎる」という出来事が起こりました。また列王記第一 19 章 11 節でもエリヤに対して主は言われました。『外に出て、山の上で主の前に立て。』するとそのと

き、主が通り過ぎた。」　そこで激しい大風や、地震や、火が起きましたが、そのいずれの中にも主はおられず、その後の「かすかな細い声」の中に主がおられました。それと同じように、イエス様が弟子たちのそばを通り過ぎようとされたのは、ご自身が旧約において啓示されたあの神と等しい方であることを彼らに示すためであったと考えられます。この出来事を通して弟子たちのイエス様に対する理解と信仰が深められるように、またそのことが嵐のただ中にある彼らを強め励ますものとなるように、イエス様はそのことをなさったのでしょう。

しかし弟子たちの反応は期待されたものではありませんでした。彼らは湖の上を歩くイエス様を見て「幽霊だ！」と思い込み、叫び声をあげます。50 節に「みなイエスを見ておびえてしまったのである」とあります。「おびえて」という部分には印が付いていて、欄外に、あるいは「取り乱して」とあります。けれどもイエス様の目的は彼らを怖がらせることではありません。ですからイエス様はすぐに彼らに語りかけられました。「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」　イエス様はここで「しっかりしなさい。わたしだ」と言われます。つまり、「幽霊ではない。あなたがたが良く知っているイエスだ。だから恐れなくて良いのだ。」　そのように励ましてくださいました。しかしここにはもう一つの取り方があります。この「わたしだ」と訳されている言葉は、原文のギリシャ語では「エゴー・エイミ」と書かれており、これは出エジプト記 3 章 14 節で主がご自分の名として示された「わたしはある」という言葉のギリシャ語訳と同じです。ギリシャ語では、通常「エイミ」だけで「わたしだ」という意味になります。「わたし」を意味するエゴーという言葉はつける必要がありません。それをあえてつける場合は強調した言い方になります。イエス様がこの出エジプト記 3 章で神が啓示された名をご自分に当てはめて語られたかどうかについては、少なくともヨハネの福音書 8 章 24 節においては確実にそうであると言えます。イエス様はそこで「わたしが『わたしはある』であることを信じなければ、あなたがたは、自分の罪の中で死ぬことになるからです」と言われましたが、その「わたしはある」は、やはりエゴー・エイミで、これは明らかに文脈上、出エジプト記 3 章の神が自己啓示の名を指しています。とすると、このマルコの箇所においてもそのように読むべきでしょうか。そのように解釈する学者は多くいます。どちらかと言えばそのように取る学者の方が多いようです。先に述べた「弟子たちの前を通り過ぎようとされた」という行為とセットで考えると、イエス様はその行為によってだけでなく、言葉によってもご自身の神性を示そうとされたと理解することができるからです。一方で、

この箇所からだけではそのように断定することを控える学者たちもいます。イエス様は行為を通してご自分が神であることを示しつつも、ご自分の口で「わたしは神である」と語られたことは、このマルコの福音書にはないという見方からです。ここにはこうした理解の幅と議論があることを覚えておきたいと思います。少なくとも明らかなことは、イエス様が水の上を歩かれたこと、そして弟子たちの前を通り過ぎようとされたことを通して、ご自分が神であることを示されたということです。そしてその神なるお方が、恐れる弟子たちに「わたしだ！」と言われました。「幽霊ではない。わたしだ。だから恐れなくて良い」と。そう語られたイエス様が船に乗り込まれると、風はやみました。激しい嵐に襲われていた湖が一瞬にして風の状態——静けさと平和の状態に変わったのです。

しかし弟子たちは心の中で非常に驚いたとあります。外側では嵐がおさまり、平和が訪れましたが、彼らの内側にはなお嵐が吹き荒れていたのです。52 節にはこう説明されています。「彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである。」つまり弟子たちは 5000 人の給食、あのパンの奇跡から、あるべき理解に至るべきだったのです。すなわち、彼らの目の前にいるイエス様はただの人間ではない。神なるお方——受肉された神であられるということです。その方が全能の御手をもって、恵みをもって私たちとともにいてくださる。だから、恐れる必要はない。そのことをパンの出来事から学ぶべきだったのです。しかし彼らにはそれができませんでした。なぜなら「心が頑なになっていたから」です。「頑な」という言葉は、単なる誤解以上の強い意味を持ちます。これは神への反抗や拒絶というニュアンスを持ちます。もちろん弟子たちは意図的に反抗していたわけではないでしょう。しかし、示された事実を受け入れようとしない心、抵抗しようとする心がどこかにあった——その心が固く閉じていて、そのために理解が進まなかったのです。この後も、そうした霊的に鈍い弟子たちの姿が繰り返し描かれて行きます。にもかかわらず主は彼ら見捨てず、なお憐れみをもって導き続けてくださいます。そのことが逆に印象深く記されて行きます。弟子たちが真にイエス様のことを理解するのは後の十字架と復活を経験してからのことです。そんな彼らをイエス様は忍耐を持って導いて行ってくださいなのです。

最後、53 節以降には、イエス様がゲネサレの地に着いた後の様子が記されています。人々はイエス様が来られたと知り、多くの病人を連れて来ました。「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人たちを広場に寝かせ、せめて、衣の房に

でもさわらせてやってくださいと懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた」とあります。これは衣の房に触りさえすれば自動的に癒やされたという魔術的な話ではないでしょう。先に 5 章 25～34 節で読んだ長血の女の癒やしの記事に照らして考えるなら、不十分な点もあったでしょうけれども、人々の信仰による求めに応じてイエス様が応えてくださったということでしょう。ここで重要なことは「みな」癒やされたとあることです。病の種類に関係なく、どんな人も——「みな」です。こうしてイエス様こそ私たちの救い主であられ、あらゆる悩み、苦しみ、問題から救い出してくださる神の子メシアなるお方である！ということをごは力強く示しているのでしょう。

以上のように今日の二つの記事、すなわちガリラヤ湖の嵐のただ中でイエス様が弟子たちを助けられた出来事と、ゲネサレの地で多くの病人を癒やされた出来事は、イエス様がどのようなお方であることを私たちに示しています。それはイエス様は神なるお方であるということです。海を踏みつけ、その上を歩かれる方。私たちの思いをはるかに超えてすべてを治める主権者なる方。また旧約の時代、人の前を通り過ぎる仕方でご自身の栄光を現された主なるお方。そして多くの病人をみな癒やすことのできるお方——その神なるお方が私たちのことを心に掛けていてくださるのです。私たちのところに来てくださるのです。すぐそばまで来てくださるのです。私たちもまた嵐の中で悪戦苦闘しているような時があります。夜中の 3 時、4 時になっても先が見えず、闇の中でもがくような時があるかもしれません。そんな中、実はイエス様がすでに近くに来ておられるのに、気が付かない弟子たちのようであるかもしれません。かえって「そこにいるのは幽霊だ！得体の知れない力だ！」と叫ぶような者かもしれません。その状況で、もし全能者であるイエス様がともにいてくださるという事実を認めることができたなら素晴らしいことです。しかし、それが良くできない者にもイエス様は語りかけてくださいます。「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない！」そしてイエス様はその言葉通り、助けてくださるのです。そして私たちの人生の舟を目的地に着くまで守ってくださるのです。ですからたとえ夜の 3 時 4 時に——向かい風の中で漕ぎあぐねているような時でも、私たちのそばに来てくださり、ともにいてくださるイエス様に信仰の目を上げる者でありたいと思います。弟子たちがそうであったように、真夜中の嵐にたとえられるような状況こそ、むしろ神の守りを不思議に体験できる時です。イエス様はそのただ中に来て私たちに語りかけてくださいます。「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」 この全能の神であられるお方

は、この世に人となって来てくださったお方です。そして私たちの代わりに十字架にかかり、罪の贖いを成し遂げて、救いを勝ち取ってくださいました。その大いなる恵みをもって、今も私たちとともにいてくださいます。この全能の救い主が今日も私たちを支え、どんな悩みや戦いの中にあっても助けてくださることを信じ、この方によりすがって歩んで行きたいと思います。神なるイエス様は私たちのあらゆる悩みや苦しみから究極的に救い出すことができる救い主です。そのことを今日の箇所からも心に刻まれ、この方により頼む豊かな救いと祝福に生かされる者とされて行きましょう。